

山北町立川村小学校

研究テーマ：人権を尊重し、互いに認め合い励まし合って、ともに伸びていく子どもの育成
～確かな知識にもとづいて豊かに伝えあう子どもの育成～

1、実践の目的

国語科を窓口に、身につけるべき確かな知識を定着させるとともに、思考力を伴った表現力を高める授業づくりをめざし、学校教育目標の達成に向けて取り組んだ。

自分の考えを表現するために、また、友だちの考えを理解するためには、確かな知識と技能が必要となる。また、豊かに伝え合う姿の実現には、生きて働く知識・技能の定着が、思考力・判断力・表現力の基礎となる。

子どもたちが「問い」を解決するための知識・技能を確実に身につけ、活用し、根拠を明確にした話し合いから、「わかった」「できた」といった、学ぶ「楽しさ」や「喜び」を味わうことができると考えた。そして、めざす子ども像を共有し、15年間の学びの連続性を教職員が共通理解した子どもの資質・能力の育成に努めていきたいと考えた。

2、実践の内容

(1) 国語科の授業・単元づくりについて
2学年の教材「スイミー」の学習では、比喩で表現されているものを子どもたちが実際に作ったり、大きなまぐろを色画用紙で表現したりするなど、子どもたちが物語の世界に浸りながら、読むことを楽しむことができるような手立てをとった。また、教科書だけでなく絵本も取り入れたことで、子どもたちの興味関心が高まった。これらの手立ては、書くことに苦手意識をもつ子が夢中になって自分の考えを書いたり、授業中に目を輝かせながら物語について考えたりと学ぶ意欲につながった。



＜国語科スイミーの授業風景＞

また、早稲田大学小林宏己教授を招聘し「子どもの問いを生かした単元づくり」をテーマに学習課題の設定。学び合う学級の親和性、多様な方法を用いる学習活動などについての助言をいただいた。子どもたちが自律的に学習を進めていくことの大切さや教職員自身が教材について「問い」を持っていくことの必要性を実感できた。



＜研究構想図＞

(2) 0歳から15歳までの一貫教育・保育の推進について

1年生の生活科では、園と小学校での交流会を行った。1年生がこれまで学習したことを分かりやすく伝えたり、学校生活について具体的に体験できる場を設定したりと、一人ひとりが目的意識をもち、意欲的に活動する姿が見られた。

2年生の生活科では、2年生が手作りしたおもちゃを使ってあそび方や場の工夫をし、1年生がより楽しめるあそびを考えた。

相手との接し方や伝え方を工夫したことは、2年生にとっても価値ある活動となった。また、この活動を園児と1年生の交流会前に行ったことで、自ら体験したことをもとにしながら園児に接する1年生の姿が随所に見られた。



<園児と1年生の交流会>

3、実践の成果

(1) 国語科の授業・単元づくりについて

国語科物語教材の実践では、場面の比較から子どもたちが学習問題を作り、登場人物の行動等を手掛かりとしながら心情を読み取った。また、これまで学習したことをもとにしながらさらに自分の読みを広げ、友だちの意見を取り入れながら考えを深めることができていた。

また、学習課題の設定では、課題解決に向けた取組を子どもたちと共有し、目標を明確にすることで、読み取り等の視点を明確

にして学習に取り組むことができた。考えを表現する場面では、山北スタンダードカリキュラムをもとにした、相手を意識した話し方や温かな反応が定着してきた。

国語科に限らず、根拠を明確にした豊かな表現での話し合いが深まり、学ぶ「楽しさ」「喜び」を感じる授業づくりにつながった。



<意欲的に取り組む授業の様子>

(3) 0歳から15歳までの一貫教育・保育の推進について

小学校の異学年交流を生かしながら、園との交流を推進することで15年間を見とおしたつながりのある学習となった。園・学校間ともに学びのある機会とするために、情報共有を密にし、互いの指導内容等のさらなる理解を図り、より充実した一貫教育・保育の推進につながるよう単元・年間計画を見直していくことが必要である。

4、今後の展開

子どもが夢中になって追究する問いの作り方、子ども同士が認め合い高めあう授業の創造、育ちの見とりなど子どもたちが関わり合いながら伸びていく授業づくりに今後も取り組んでいく。

また、園・学校間のつながりを生かした交流を推進し、一貫教育・保育をより意識した活動を展開する。また、切れ目のない教育・保育のつながりを中学校との接続にも生かし、具体的な取組を進めていきたい。